

# 令和3年度 学校評価(学校自己評価・学校関係者評価)

養父市立伊佐小学校  
令和4年3月15日

## 1 学校教育目標

**ふるさとを愛し 自らを高め 未来への道を切り拓く 八鹿青溪っ子の育成**

## 2 本年度の重点目標

■ふるさとを愛し、集団の中で自己の有り様を考え、実践できる児童を育成する ■知・徳・体のバランスを保持し、「確かな学力」を備えた児童を育成する ■「チーム伊佐」をめざす

## 3 学校自己評価結果 (A 優れている B 良い C 良くない D 要改善)

評価項目・取組内容		達成状況	学校の取組状況・改善の方策
めざす教育	1 学校は、学習・生活環境の整備に努め、子どもたちが意欲的に生活を送ることができる学校づくりに努めている。	A	<b>【めざす教育】</b> <b>【学校】</b> ・教室環境や施設内の掲示など職員が積極的に環境整備を進め、落ち着いた環境で学習活動に取り組んでいると思う。 ・学校施設や設備については改善点も多く、優先順位をつけて進めていくことが必要であるとともに、関係機関と連携して早期の改善を要望する。 ・児童会が粘り強く取り組み、あいさつの声の大きさや言い方が良くなった。 ・ルーティン的な挨拶はできるが臨機応変な挨拶に課題が残る。その場その場の指導を入れていく。 ・PTAや地域の方のお力添えで、児童の登下校や環境整備など児童の安全・安心が守られている。 <b>【教員】</b> ・休み時間等授業中以外でも児童を細やかに見守り、児童一人一人の状況を考えてながら指導できている。 ・児童の視点に立ち、寄り添いながら成長に導く職員ばかりで、素晴らしい集団だと思う。 ・来訪者や、電話・連絡帳等への対応を常に時間を掛けて丁寧に行っている。 ・地域の方が来校された際に地域での児童の様子を聞き、校内に還元できるようにする。 ・学校が聞くべき声と保護者や地域の方にお返しすべき声の判断を大切にしている。 <b>【児童】</b> ・職員の授業展開の工夫で、進んで取り組む児童が多いと感じる。 ・道徳教育を根幹として、自他を認める、意見を聞くなどができるようになってきている。 ・子ども自身が困る前に手立てをしてしまいがち。失敗しても立ち上げられる経験をさせたり、任せる場面を増やしたりしていく。 ・常に、目標とする「めやす」「めあて」を明確に提示し、ステップアップできるように工夫する。 ・ねばり強くやり抜く場面があまりなかったため判断しにくい。そのような機会を設定していく。 <b>【小中一貫教育・地域連携】</b> ・小中一貫の目指す方向が曖昧になってきており、再度構築し直す必要がある。また市全体としても再考する必要がある。 ・個人情報守秘義務遵守の観点から考えても、できるだけ発信はできている。 ・懇談会等で保護者等からの意見を求め、分かりやすい情報発信に努める。 ・通信等の大量発行が当たり前になり、過度な負担にならないよう心掛ける。
	2 学校は、子どもたちの明るい挨拶が響く学校づくりに努めている。	A	
	3 学校は、地域とともに歩む、安全で安心な学校づくり(信頼される学校づくり)に努めている。	A	
	4 教員は、使命感や教育愛に満ち、子どもたち一人一人を大切にしながら日々の教育活動に取り組んでいる。	A	
	5 教員は、子どもたちや保護者の方、地域の方の声を聞き、学校教育に反映しようとしている。	A	
	6 子どもたちは、物事をよく考えて判断し、進んで学習に取り組もうとしている。	A	
	7 子どもたちは、思いやりの心を持ち、仲間と協力して成長しようとしている。	A	
	8 子どもたちは、何事もねばり強くやり抜こうとしている。	B	
	9 学校は、「小中一貫教育」の取組内容について、保護者の方や地域の方に理解されるように努めている。	C	
	10 学校は、上記1～9の内容を、学校行事・PTA活動・各種便り・ホームページ等で分かりやすく伝えている。	B	
学習	11 算数の複数指導(教師二人での指導)やがんばりタイム(放課後の学習支援)は、個々の力を伸ばすのに効果的である。	A	<b>【学習】</b> <b>【新学習システム・がんばりタイム】</b> ・算数の複数指導や「伊佐っ子ががんばりタイム」の取組は、それぞれの児童に見合った学習形態での指導が進められ、児童のつまづきの早期発見や基礎基本の定着に大変効果的である。 <b>【タブレットを用いた学習】</b> ・主体的に取り組む力を伸ばすことに特に有効だった。 ・書く、声に出すなどこれまでの学習スタイル(不易)と、タブレットを用いた学習形態(流行)を両立させながら効率よく進めていく。 <b>【体験学習・ふるさと学習】</b> ・コロナ禍の中、感染対策をしながら学年毎に工夫して取り組むことができた。 ・コウノトリについては、以前していた全校生当番制での観察日記等、学校全体での取組を復活させたい。 ・学年で学んだことを発表する場を設けることで「〇年生になったら」という心構えを持たせたり、全体での共有を図ったりする。 ・こだわりを持って発展させたり深めたりできるような活動を進める。 <b>【そうあんくんの日】</b> ・今年度の取組は、自分で考え、家庭で相談し、自主的に行う活動であった。自主性も発揮され、保護者からの評価も高いものと考えられる。 ・家庭による捉えや声かけに差があり、効果に曖昧さがある。進め方等各家庭に任せ、平日のルーティンを向上しながら生活させる等、取り組みやすいものとしていく工夫を考える。
	12 タブレット等を用いた学習は、子どもたちの学習理解を深めることに有効である。	A	
	13 “そうあんくんの日”の取り組みは、望ましい家庭生活について考える上で効果的である。	B	
	14 生活や総合的な学習の時間を中心に、コウノトリなどのふるさと学習に積極的に取り組んでいる。	A	
	15 農業体験・氷ノ山登山・自然学校・修学旅行などの体験は、子どもたちの成長に結びついている。	A	
	16 学校行事は、その実施時期や内容に工夫が凝らされ、適切に実施されている。	A	
	17 子どもたちの様子は、懇談や通知表で分かりやすく伝えられている。	A	
生活	18 学校は、いじめや生活指導上の問題などの早期発見に努めている。	B	<b>【生活指導】</b> ・職員が、これまで以上に「いじめ」に対する認識を高めていると感じる。「何があったか」ではなく「どうして解決するか、どう指導するか」に力を置くことができていく。 ・月ごとのアンケートは早期発見に大変効果を上げている。アンケートに上らない児童の「雰囲気」に気を配り、些細な事を大切にしながら指導していく。 ・学級だけでなく、学校全体で問題を把握し対応していく体制ができており、子どもたちの学校生活を様々な目で見守ることができている。 ・日常生活の中で繰り返し「命は一つ」が指導されており意識付けられている。 <b>【保護者・家庭との連携】</b> ・学級では、気になる事案はその日のうちに家庭連絡を行い、児童に関する情報交換を保護者と常に行うことができた。 ・メール配信など活用し、児童の安全・安心に関わる迅速な情報提供ができた。 ・校内の安全点検は定期的に行い、適宜修繕を進めている。 ・保護者の事情や状況をできるだけ踏まえた上で、相手の感情にも配慮しながら学校としての立場も明確にした連携を図れるように今後も尽力する。 ・外部指導者の招聘等、PTAや地域とも連携した取組を工夫・拡大することで学校の指導と家庭や地域の指導を共有し、より強固な見守りを目指す。
	19 学校は、生活のきまりやSNSルールに基づいて、日頃から生活指導を行っている。	A	
	20 学校は、子どもたちと個別に話を聞く機会を持ち、適切に対応するように努めている。	A	
	21 学校は、家庭と十分に連絡を取り、連携が取れた指導を行うように努めている。	A	
	22 学校は、安全で安心な学校生活が送れるように、適宜指導を行っている。	A	
PTA	23 学校は、学校行事やPTA活動などを通して、保護者の方や地域の方との相互理解が深まるように努めている。	A	<b>【PTA】</b> ・コロナ禍の中、役員さんや委員さんには様々な活動を十分に協議・検討していただきながら最善の運営をしていただいた。 ・地域の方に来校いただくことは叶わなかったが、感染対策を見据えながらできるだけ保護者の方に来校いただける学校行事の運営を行った。 ・コロナ禍で学校と地域との連携のあり方が問われている。縮小・削減も視野に入れながら、地域の思いも含めて両立できる工夫を考え、学校と地域がWin・Winの関係を作ることが望ましい。
	24 PTA活動は、適切に運営されている。	A	

## 4 総合的な学校関係者評価

各項目において、概ね妥当な評価であった。児童も安心して意欲的に学校生活を送っている様子である。今後も変わらず児童に寄り添い様子を見ていただくと同時に、特に学級経営、学校経営についての研鑽を深めていただきたい。家庭においては子どもの様子を客観的に捉えらえるよう、親子のコミュニケーションを十分に深めて欲しい。コロナ禍で学校・保護者・地域の連携が難しいが、リモート等の利用で連携の強化を図りたい。

## 5 評価項目ごとの学校関係者評価

自己評価の適切さ
○概ね妥当である。
○保護者の評価と学校の評価とのバランスが取れている。親の目と職員の見る目が一致している。
○コロナ禍の影響で児童や職員の様子を見る機会がなかなか取れなかったが、その機会で見ると、児童は安心して学校に来ており、職員は児童をしっかり受け止めている。
○人は失敗をして成長する。失敗を恥と思わず、皆で高めていくことができる様な学校運営、学級運営を進めて欲しい。
○粘り強さについては、児童に対する期待が大きすぎるのではないかと。学校だけではなく、家庭や地域の大人を見ながら身につけていく面もある。大人が自らの行動で教えていく姿勢を共通して意識していきたい。
○小中一貫教育は、中1ギャップの解消という点のみ意識が集中してしまっているように感じる。他の学年でもオンラインでの交流を行う等、同学年同士が歩調を合わせて連携を進めていくようすれば意識が変わり、方向性も見えてくるのではないかと。
○配布物や便り、ホームページ等、工夫した情報発信はできていると思うが、行事や会合等で顔を合わせなければ伝わらない、あるいは伝えにくいことも多い。コロナ禍のためやむを得ない。
○保護者、学校双方の評価の平均値から判断すると、8～10の項目の評価は、それぞれ1ランク上(8がA、9がB、10がA)でもよい。
○妥当である。
○児童の学力向上は学級経営が基板となる。落ち着いた学級経営がなされるよう研修を深めて欲しい。
○タブレットを用いた家庭でのリモート学習は画期的である。保護者の支援が不可欠なので、誰もが操作方法等を理解できるような機会の設定が必要である。
○学校によって外国語への取り組みに差が出ないように願う。
○そうあんくんの日は、児童と家族との繋がりを深めたり、ゆったりとした時間を過ごすことで頭の中を整理する機会をつくったりするという面で意義は深い。本来学校から内容を指示するものではないのだから、何を取り組んだら良いのかが難しい家庭もあるので、選択肢を提示したりして工夫しながら今後も継続を望む。
○お手伝い大作戦は児童の意識・意欲を高めるのに効果があった。
○妥当である。
○いじめについては、学校と保護者とで見守りがずれているのではないかと。親が決めている部分もあるように思う。点数だけで判断してはいけない。現実的な判断をすべきである。
○児童から先生に言いにくいこともある。職員は勿論、保護者や地域全体で声を掛けながら、様々な目で情報収集・情報共有をしていく。そのためには、皆が面と向かって話ができる機会が重要となるが、コロナ禍での難しさがある。
○学校外での児童の生活や活動については、学校はある程度線を引き、保護者や地域の力に任せることも必要である。
○妥当である。
○コロナ禍で学校・保護者・地域の交流の場が少なくなり、お互いに相手のことが分かりにくくなっている。オンラインの活用等で、見える化を進めることも必要となっている。
○コロナ禍が収まった際に、それまでの活動を復活させることができるのか。少子化のことも絡めて、地域でも見直しを図っていかねばならない。